

地域の小学校におけるセンター的機能としての取組

—授業改善の視点—

村 岡 綾 [鹿児島大学教育学部附属特別支援学校]

飛 田 真 里 [鹿児島大学教育学部附属特別支援学校]

The central function of the elementary school in local areas

— Viewpoint of improving classes —

MURAOKA Aya・TOBITA Mari

キーワード：センター的機能、巡回相談、授業研究、授業改善、通常学級におけるユニバーサルデザイン

1. 取組の背景

1.1 はじめに

平成19年から特別支援教育が学校教育法に位置付けられ、すべての学校において、障害のある幼児児童生徒への支援の充実が求められるようになった。そして、特別支援学校が地域の特別支援教育のセンター的機能としての役割をもち、小・中学校等に対する支援などを行うことが学習指導要領にも明記された。そこで、特別支援学校は、地域の小・中学校等において、特別支援教育等に関する相談・情報提供等や、障害のある児童生徒への指導・支援について特別支援教育の視点での助言又は援助を行うようになった。

特別支援学校のセンター的機能の取組が始まって10年が経ち、地域の各小・中学校における特別支援教育に関する内容の理解は進んでいる。しかし、実際に特別支援教育を実践するに当たって、校内支援体制の構築が課題となっているところが多い。また、平成28年の障害者差別解消法の施行に伴い、インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進が喫緊の課題となっており、特別支援学校においても、地域の各小・中学校に対して、特別支援教育を即実践につなげることができるよう提案の在り方が課題となっている。

1.2 本校支援部の概要及び課題

本校支援部は、7人の特別支援教育コーディネーターが所属しており、地域のセンター的機能として、附属学校園だけでなく、地域の小・中学校に対して、巡回相談等や早期教育相談事業の取組を行っている。

早期教育相談事業は、本校における体験学習や地域の保育所、幼稚園への巡回相談、外来相談等があり、時には地域の保健センター等とも連携を図りながら、特に未就学の児童についての教育相談等を行っている。

巡回相談については、昨年度、保育所、幼稚園が44件、小学校が4件、中学校が6件、計54件

の巡回相談の要請があり、内容は、幼児児童生徒の行動観察及び教育相談が多い。

教育相談においては、気になる行動に対する具体的な支援の在り方など個に対応する支援方法を聞かれることが多く、各学校園が特別支援教育を充実させるための園内・校内支援体制づくりに対する相談を行うことは少ないことが、本校支援部の課題にもなっている。

昨年度より、インクルーシブ教育システム構築を意識し、合理的配慮の観点や対象児を中心に考えた際のユニバーサルデザイン化の在り方も取り入れながら支援方法を提案するようにしている。

対象児を中心に考えた際のユニバーサルデザイン化の在り方は、各学校園が特別支援教育を充実させるための園内・校内支援体制づくりにつながるのではないかと期待し、提案内容や提案の仕方を検討しているところである。

1.3 本校における研究の概要

本校においては、平成25年度から「子供の学びから始めるカリキュラム開発」と題し、児童生徒の学びに着目した授業づくりの在り方について研究を行っている。平成27・28年度の研究「子供の学びから始めるカリキュラム開発Ⅱ－計画・実施・評価・改善のプロセスを効果的かつ効率的につなぐ授業研究の在り方－」においては、学校全体で児童生徒に育てたい力について整理し、それらを育むための授業づくりの在り方を明らかにすると共に、日々の授業や年間指導計画の評価及び改善を効果的かつ効率的に行う方法を明らかにする研究を行った。その中で、日々の授業記録を用いて1回20分間の授業ミーティングを実施し、児童生徒の学びの姿を評価及び分析し、次時に向けた改善案を検討すると同時に、授業計画シートの内容を合わせて評価するようにした。成果としては、毎回の授業について複数の教師が児童生徒の学びの姿を振り返り、分析したり、改善案を検討したりすることが日々の授業改善につながる事が分かり、単元や題材の評価にもつながることが示唆された。

しかし、課題として、すべての授業で授業ミーティングをすることの難しさや効率的に授業研究をするための解決策について検討する必要があることが挙げられている。そこで、授業研究については、各学部の経営に基づいた日常的な取組として位置付け、授業者の要請に応じて取り組むことができるようにし、継続的に実施可能な授業研究を実施することとした。

今年度の研究においては、これまでの研究を基盤に、本校の児童生徒に育てたい資質・能力の育成という観点で単元（題材）の目標や指導内容、学習活動及びその評価・改善を行う手続きを整理し、それに基づく授業研究を組織的・継続的に実施することで、児童生徒の学びの姿を根拠にした教育課程の評価・改善の在り方を明らかにすることを目的としている。

そこで、本校が取り組んでいる授業研究の一端を、校外の小・中学校、特別支援学校の教職員に知ってもらうとともに、日常的に授業研究を実施し、児童生徒の学びの姿を記録することが授業改善及び教育課程の評価・改善につながるか検証するために、夏季休業中に研修会（スキルアップセミナー）を実施した。

2. 取組の仮説

地域のセンター的機能として、本校で実施している児童生徒の学びの姿から授業改善につなげる授業研究の在り方を、地域の小学校に提案して実施してもらい、その事例を基にした研修会（スキルアップセミナー）を実施することで、地域の各小・中学校における特別支援教育の充実につながるのではないかと考えた。

3. 取組の流れ及び内容

本校が巡回相談を担当する地域の小学校から巡回相談の要請があり、巡回相談を行った。巡回相談の内容は、授業参観及び対象となる児童の行動観察であり、巡回相談記録を通して、合理的配慮の観点を踏まえながら考えられる状態像や手立てを担任教諭と共有した。また、ユニバーサルデザイン化も踏まえた全体像についても分析し、対象となる児童への個別の対応だけでなく、一斉指導で行うことができる環境整備によるユニバーサルデザイン化についても検討するようにした。

そして、対象となる児童の授業の様子を録画し、本校の研究で実際に行っている「学びの姿を授業ミーティングで分析し、次時の授業への改善点を導き出す授業改善」により、ユニバーサルデザイン化につなげるようにした。

さらに、この事例を基に、地域の各小・中学校の教師を対象とした研修会を実施し、出席者全員が授業ミーティングを通じた授業研究を行うことで、多角的な視点で授業改善につながる意見を出し合い、今後の指導・支援に生かすようにした。

この取組を通して、地域の各小・中学校の教師が、児童の学びの姿から授業改善につなげる方法を知り、校内における授業研究の方法の一つとして各学校で活用することで、校内支援体制の構築にもつながるのではないかと考えた（図1）。

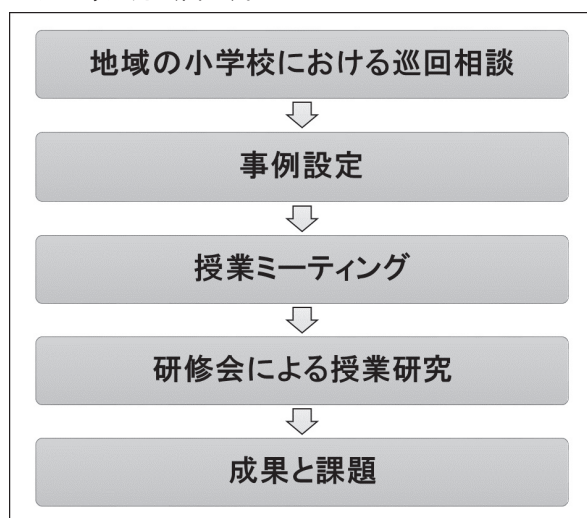


図1 取組の流れ

4. 取組の実際

4.1 地域の小学校における授業研究の提案

地域の各小・中学校は、これまで、職員研修等で特別支援教育の研修を重ねており、障害のある児童の理解が進んでいる。そして、特別支援学校の巡回相談等も活用し、個に応じた具体的な支援方法を知り、実践しているところもある。

しかし、職員研修の内容のほとんどが講話であったり、巡回相談で提案された個に応じた支援方法を他の場面で活用することが難しかったりするため、各自で支援方法を見出す校内支援体制が未整備の状況がある。

そして、地域の各小・中学校においては、特別支援学級在籍の児童が交流学級（通常学級）の授業に参加する際、教師が支援方法に悩むことも多い。特に、交流学級（通常学級）における指導の際のユニバーサルデザイン化に課題があり、分析を深め、より効果的な指導・支援の在り方を探る必要があると考えた。

そこで、本校が巡回相談を担当する地域の小学校に対して、特別支援教育コーディネーターを通して、夏季休業中に計画している本校の研修会（スキルアップセミナー）に、特別支援学級に在籍する児童が参加する交流学級（通常学級）における授業を事例として提供してもらうよう提案した。小学校にとっても校内の特別支援教育の充実につながる良い機会になるという期待もあり、校内研修として教職員が研修会（スキルアップセミナー）に出席することも合わせて計画し、実施することとなった。

4.2 地域の小学校における授業参観

本校が巡回相談を担当する地域の小学校において、情緒障害特別支援学級在籍の一人の児童を対象にして交流学級（通常学級）における国語の授業の撮影を行った。また、後日、算数の授業参観も行い、行動観察したことを、巡回相談記録（図2）を通して、合理的配慮の視点を踏まえながら、考えられる状態像や手立てとユニバーサルデザイン化も踏まえた全体像を情緒障害特別支援学級の担任（特別支援教育コーディネーター）と交流学級担任に伝え、今後の指導・支援につなげるよう提示した。

ここまでの、本校が様々な保育所、幼稚園、小・中学校における巡回相談で行っている内容であり、このような支援方法の提示から各学校園自体が特別支援教育を充実させるための園内・校内支援体制づくりにつなげるための提案の在り方を課題としている現状がある。

(幼稚園・小学校・中学校) 巡回相談記録		
対象児童 年 組 (男・女)		鹿児島大学教育学部附属特別支援学校 飛田・村岡
<担任> 教諭		
【基本情報】		
主 訴	◎ 授業に集中することが難しい。	
現在行っている 手立て (合理的配慮)	・ 1日の学習の流れを提示 ・ 物音防止のための机格子のテニスボールカバー	
その他情報	・ 情緒障害特別支援学級在籍	
【行動観察】 平成29年6月●日 (●) 11:15~12:00 [(4) 校時 (算数)]		
Chloe	(O)学校から ●見られた姿	考えられる状態像 →椅子座位のつらさあり →腰を揺れることあり →一足が床に付いていない →椅子の高さ△
	考えられる手立て(合理的配慮の観点)	腰の動きも極端な動き。腰を入れすぎたり入れなすぎたりして、ちょうどよい力ができないので、長時間同じ姿勢で座っていること自体が苦痛な様子。学習に動きを持たせる工夫が必要。【(1-10)の観点】 椅子の高さの検討と、必要であれば、背当てになるような座布団の使用も検討する必要がある。【(1-10)の観点】 本児の腰入れの力を育てるためには、粗大運動で、物を拾ったり押したりする動きが有効である。【(2-2)の観点】
Elyse	● 「じこく」と聞いて、「じこくじこく」と周りの友達に伝える。	→音を拾う力◎ →聞いてイメージする力◎ →音を拾うことがで きる環境◎
	考えられる手立て(合理的配慮の観点)	聞くことについては反応が早いので、聞いて見える方法(掛け算九九、語呂合わせ)を活用した字の定着を図りたい。支援学級で特性に応じた力の発達の乳方を身に付けて、交流学級の一斉指導でその力を使って学習するような形がとれるようにしたい。【(2-2)の観点】
Elyse	● 注目すべきところをまったく見ていない。	→注目する場所まで目が届いていない →視野の狭さあり →目の跳躍△
	考えられる手立て(合理的配慮の観点)	今の席では、一斉指導で提示された視覚教材がまったく目に入っていない。動画には注目できていたの、よほど興味・関心を引くものであれば、注目する。一斉指導で指導するのであれば、席の検定が必要。【(1-10)の観点】 目の調節が苦手なので、自分で友達を見てモデルにすることを板書が苦手であると思われ。そのため、教師が注目を促す工夫が必要。【(1-10)の観点】
Elyse	● 席を揺れることあり。	→学習内容に集中していない →手持ち無沙汰 →板書を求めて →見通しをどこまで?
	考えられる手立て(合理的配慮の観点)	支援としては、『見通し』も必要。1日の学習の流れが提示されるように、1時間目の学習の流れを提示できると集中できる時間も長くなるかもしれない。【(2-3)の観点】 席に戻って正しく行動をしているときを大々褒めて、本児の自己肯定感を高めると共に、周りの子への印象としても本児の良きを感じられるようにしたい。【(2)の観点】
Elyse	● 終わりの挨拶が始まると動く準備をして、挨拶をする前に動き出す。	→早く次の行動をしたい? →区切りを理解
	考えられる手立て(合理的配慮の観点)	次の行動が何だったか知っていたが、授業時間と休み時間の区切りを認識して、見通しをもって行動できると捉えられる。生かしたい力。【(2-3)の観点】
合理的配慮の観点	区①-1 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮	
	区①-2 学習内容の変更・調整	
全体所見 (ユニバーサルデザイン化も踏まえて)	区②-1 情報・コミュニケーション及び教材の配慮	
	区②-2 学習機会や体験の確保	
合理的配慮の観点	区②-3 心理面・健康面の配慮	
	区②-1 専門性のある指導体制の整備	
合理的配慮の観点	区②-2 幼児児童生徒、教職員、保護者、地域の理解啓発を図るための配慮	
	区②-3 災害時等の支援体制の整備	
合理的配慮の観点	区③-1 校内環境のバリアフリー化	
	区③-2 発達・障害の状態及び特性等に応じた指導ができる施設・設備の整備	
合理的配慮の観点	区③-3 災害時等への対応に必要な施設・設備の配慮	
	全体所見 (ユニバーサルデザイン化も踏まえて)	・ 情緒学級との連携を図り、情緒学級で『何を学習』しているか、それを『集団でどのように生かせるか』を確認して、手立てを検討していく必要がある。 ・ 学習に動きをもたせたり、学習の流れをバージョン化したりとすることが有効である。 ・ (足踏、かがり、お尻、手) 踏かせる活動を設定することで、本児の落ち着きにつながるアプローチができる。音がしている間は動いて、音が止まると止まる…などの経験も有効。

図 2 巡回相談記録

4.3 地域の小学校における授業ミーティング

授業ミーティングを設定するに当たって、事例として提供してもらった国語の授業における対象となる児童の様子と教師の働き掛けのマクロ分析を行った(図3)。そして、学んでいた様子や学びにつまずいていた様子がよく見られる授業の場面15分間を抽出して20分間の授業ミーティングを行うことにした。

授業ミーティングでは、対象となる児童がめあてを書く際は、見て書くよりも聞いて書くことが有効であることや、姿勢が崩れやすいことが挙げられ、授業の改善点として、読み上げながら板書することや座席位置や椅子の工夫が必要であることが導き出された(図4)。

特に、読み上げながら板書することは、教師自身が意識することなく自然に行っていた手立てであり、VTR視聴と授業ミーティングをすることで、有効な手立てであることを意識することができた。

地域の各小・中学校において、教師が意識することなく行っていることが合理的配慮やユニバーサルデザイン化に既になっていることも多く、それらを明らかにし、すべての教師が共有するだけでも、校内支援体制の構築につながるのではないかとということも分かった。

H29.06. ● 国語「スイミー」授業記録

【・ A児の様子 , ○ 一斉への教師の働き掛け , ● 個別に教師の働き掛け】
 ～前略～
 9:05
 ○ 電子黒板に教科書を映して, 「はい, スイミーいきます。」の言葉掛け
 ・ 自然と教科書を開いて, 見る。(スイミーのページではない)
 ○ スイミーの前時を児童に問い掛けながら振り返る。
 9:48
 ・ スイミーのページ(電子黒板と同じページ)を開くと, パンパンと拍手する。
 →「できた」の意味?
 ・ 教師の問い掛けや友達の発言は, 耳には入っていない?
 ・ 後ろの友達が書いているのを見る。
 ・ 教科書の違うページをめくっている。
 ○ 音声でゆっくり伝えながら, めあてを板書する。
 10:45
 ・ 教師がめあてを読んでいることに気付く, ノートを広げて書き出す。
 ・ めあてを書く際, 板書をほとんど見ることはなく, スラスラと書き出す。
 →音をたよりに書いている?
 ・ めあてのどこを書いているか分からなくなったとき, 板書から探し出すことができず, 隣の友達のノートを見るが, 分からず, 再度, 板書を確認。あとは, 2文字くらいずつ書き写している状態?
 →音で聞いたものは, ためておいて書くことができるが, 見たものは, 区切る場所が分からず?
 ・ 一生懸命めあてを書き, 定規で線を引きながら「3マス残った。」と発言。
 13:00
 ● 教師が机間指導で近付き, 「今日早かったね」と称賛
 ・ 定規で必要以上の強さ回数で線を引く, 定規に鉛筆をさして遊び出す。
 →ちよつとしたことが, 遊びにつながる。
 ○ 教師の「はい鉛筆を置きましよう」の指示。
 ・ 一斉指示は入らず, 定規と鉛筆で遊んでいる。
 ○ めあての一斉読みを指示。
 ・ 鉛筆のカスを気にして払う。
 ・ 一斉読みが始まって, 教師を気にはしているが, 定規と鉛筆を置くことはない。
 ・ 定規で削った鉛筆の書き具合を確かめるように, ノートに「は」と書いて消す。
 ・ 鉛筆のカスを気にして払う。
 ○ 「○読み, 教科書持って」と持ち方のモデルを提示し, 音読の姿勢を整えるために待つ。(周りの児童は, 教科書を立てて準備する。)
 ～後略～

図3 児童の様子と教師の働き掛けのマクロ分析

題材名		次・時数等		日々の授業記録		授業ミーティング日時 ※実施した順に記入	
国語「スイミー」		2次(9/12時間目)		平成 29年 6月 ●日		平成 29年 7月 28日 (15:15 ~ 15:45)	
本時の全体目標							
5の場面で大きな魚を追い出した時のスイミーたちの様子や気持ちを読み取ることができる。							
児童生徒の姿 (どの場面でも〇〇さんが [] していた。)				なぜ		どうする	
学んでいた		学びにつまずいていた				次の授業	他の授業・生活場面
<ul style="list-style-type: none"> 教科書を一番に開く。 先生が「5の場面で」とめあてを読みだしたのをきっかけに, 姿勢を直し, めあてを書き始めた。 定規を上手に使って線を引いている。 友達の発表をよく聞いて同調していた。 		<ul style="list-style-type: none"> 教科書を開くが, 学習ページではないところを開いている。 めあてを書くうちに途中で分からなくなり, 隣の友達を見る。 教科書の目標の読み上げをみんなと一緒にしない。 途中で寝転ぶ。 椅子をぐらぐらさせる。 		<ul style="list-style-type: none"> 学習の流れを覚えていない。 教師の声をよく聞いている。 教師がゆっくり, 間を意図して話したことで入りやすかったのでは。 「板書を見て書く」より「聞いて書く」方が得意。 隣に手本となる友達がいた方がよい。 腰が入っていないことで, 椅子に座り続けることがきつい。 		<ul style="list-style-type: none"> 見通しがもてるように, 学習の流れをある程度固定化する。 	<ul style="list-style-type: none"> 読み上げながら板書をする。 席の配置(前, 隣) 学級全体で姿勢を正して授業に入る意識付けをする。 椅子の工夫。
<p><思考力・判断力・表現力/人間関係/主体性を育む視点> ①学習した知識や技能を主体的に使う / ②自分の考えを主体的に表現する ③主体的に知識と協力・感動する</p>				<p><学習の姿の分析及び指導等の場の視察> ア 目標設定に関すること (79C) 0230 / イ 学習活動の設定に関すること (79C) 0288 ~ 0290 / ウ 授業実践に関すること (79C) 0288 エ 指導の手立てに関すること (79C) 0250 / オ 目標を達成するための基盤となる力 (79C) 0288 / カ 他の単元(題材)や各教科等, 生活場面との関連 (79C) 0288 ~ 0290</p>			

図4 授業ミーティングの記録

4.4 地域の小学校を対象とした研修会の実施

夏季休業中に実施した本校の研修会（スキルアップセミナー）では、各学部の授業だけではなく、地域の小学校に提供してもらった授業のVTR（学んでいた様子や学びにつまずいていた様子がよく見られる授業の場面15分間）を視聴し、授業研究を実施する分科会を行った。

小学校教諭17人、特別支援学校教諭6人が参加し、小学校教諭のうち、8人が特別支援学級の担任、3人が特別支援教育コーディネーター、5人が通常学級担任であった。本校の職員をファシリテーターとして各グループに配置し、参加者を4、5人の5グループに分けてVTR視聴、授業研究を行った。

対象児が学ぶ姿として、「めあてを書き写し、定規を使って線で囲んでいた」姿が多く挙げられ、その背景として、これまでの学習の積み重ねにより、授業の流れを理解し見通しをもつことができていることや対象児の聞く力の強さから教師がめあてを読み上げたことが効果的であったことが意見として出された。

このことから、学習の流れの固定化や積み重ねの実施や聴覚的な支援の有効性が今後の支援に生かすことができることも分かった。また、授業を進めるうえで黒板や教師に注意を向けることができるように大事なことを話す前に手を叩く、沈黙の時間を作るなどといった工夫も提案された。

一方、対象児が学びにつまずいていた姿として「めあてを書き写す取り掛かりが遅かった」「音読で読む場所が分からなかった」姿については、「教師が全体に準備を確認する言葉掛けを行う」「隣の友達とお互い確認する」といった具体的な学習活動の工夫が挙げられた。

その他に「姿勢が崩れていた」「離席していた」姿については、筋力の弱さや意識がそれやすいことが原因と捉え、音読は起立して行うといったような学習活動の中で動く活動を意図的に設定することも今後の支援方法として挙げられた。

授業研究の後、本分科会のアドバイザーとして鹿児島大学教育学部准教授の雲井未欽先生から以下のような助言をいただいた。

「ユニバーサルデザインとは、個への対応が結果としてコミュニティ全体に効果を発揮することである。学級の中で支援の必要な子どもを介して一斉指導と個別指導の間を探ることが重要である。全体の授業を見直すことで、困っている子どもにとってもよい支援につながる。その逆も同様である。また、課題そのもののユニバーサルデザインとして、時間的な流れで課題がどう構成されているかということにも言及したい。めあてが子どものめあてになっているかという妥当性やどうやったらそのめあてに近付くことができるか、今はそのめあてにどのくらい近付けているのかを子どもたちが分かる手立てや目指すめあてに向かって動機付けができてきているかを大事にしたい。授業研究で子どもの姿から分析することは重要であるが、子どもが何を考えて行動したのかということや授業への意欲まで思いを巡らし、捉える努力をしながら授業について考えていきたい。」

5. 成果と課題

5.1 成果

- 小学校においても、本校で実施している児童生徒の学びの姿から授業改善につなげる授業研究の在り方は有効であり、一人の児童の様子を分析することで、ユニバーサルデザイン化の視点も踏まえた一斉授業の授業改善を行うことができた。
- 研修会で実施した取組を他の幼稚園、小・中学校に紹介すると、「自分の学校でも実践したい。」という意見も出て、今後実践する予定である。各学校園が特別支援教育を充実させるための園内・校内支援体制づくりにつなげる事例を作ることができたと考える。
- センターの機能の取組として、特別支援教育の視点で授業研究の在り方を積極的に提案することで、地域の小学校自体が特別支援教育を推進することにつながるのではないかと考える。

5.2 課題

- 授業ミーティングを行い、授業改善を行うことが、授業のユニバーサルデザイン化につながることは分かったが、授業ミーティングの時間設定の難しさや授業研究を進めるファシリテーターの育成が課題になると考える。
- 本校で実施している授業研究の在り方を簡単に説明できるようマニュアル化し、各学校園に紹介することで園内・校内支援体制づくりにつなげることができるのではないかと考える。

6. 参考文献

- 相澤雅文・清水貞夫・三浦光哉 「必携 特別支援教育コーディネーター」
(かもがわ出版 平成19年)
- 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校 研究紀要第21集「子供の学びから始めるカリキュラム開発Ⅱ－計画・実施・評価・改善のプロセスを効果的且つ効率的につなぐ授業研究の在り方－」
(平成28年)